

私も人生の終りに近づきつつ、第二の人生を求め歩いた若い日の尊い体験は生涯、私の脳裏から焼きついて忘れ去ることはないでしょう。

再び訪れることの無いふるさと、短い期間だったが書き尽くせぬ程の長い旅路でした。

我が家の敗戦体験

北海道 池田 幸次郎

ソ連の参戦と満州の占領

拳銃の射ち方を妻に教え、万が一のときは子供と二人で死ぬのだ。このあたりの陸軍官舎はもう人影は見えない。居抜きのままの空家になっていた。

昭和二十年八月九日、満州の主要都市を爆撃、ソ満国境を突破したソ連軍は進撃を始めていた。

その日の朝、突然の命令で軍関係および満鉄の家族は、本日十二時〇分の列車で日本に帰還せよ、持ち物はトラック一個。

当時、子供はハシカのあと消化不良を起こし、往診の先生は母親の血を太い注射器で腹の上から腸に注入したりして危険な状態であったことから、帰還列車に乗せなかったのである。何組かこのようにして残った家族は、暴民が空家を襲うことを考え、数日後に役所の地下へ収容された。

そのころ、ソ満国境付近の日本人住民は、列車もトラックもなく現在のようにバス・マイカー・タクシーなど是一台もない時代、徒歩で逃避行を続けていた。背中には大きな子供を、前には小さな子供を背負った母親・老人・体の悪い人など、どのくらい歩けるだろうか。

入院中の人は殺していつてくれと言われ、注射で処置をしたと引き揚げた病院の先生は言っている。歩けなくなった人は子供を満人に預け、また、集団から遅れた者はそのまま置き捨てられた。その人たちはどうなったかは当時知るすべもなかった。満州の孤児は皆それである。死亡・不明者の数々を出した。

関東軍司令部からは防戦の命令はなぜか出されなかった。一部では防戦をした部隊もあったという。なぜ、そ

れは後で解ったことだが、ソ連を通じてアメリカに降伏を申し入れていたからだということであった。

一方、関東軍命令で日本に（朝鮮經由）帰国したと思われる家族たちはもう日本に着いていると思っていたが、（その時はまだ治安も良かった）ソ連軍の北朝鮮占領により三十八度線でストップとなり、これもまた大変な目に会っていたことが、後日の情報で知ったのである。持ち物はトランク一個、預金通帳などは持って逃げたと思うが、銀行・郵便局は閉鎖となりおろすこともできない。女・子供ばかりである。身を売り、女中をし、一変して地獄の生活となった。今にして思えば、逃げることでできなかった民間人のほうが難を逃れたと言える。

新京（今の長春）駅近くに関東軍司令部の建物があった。作戦上か、通化に移り、あとには召集部隊がどんどん入ってきた。

私は司令部前の別館であった関東軍新京陸軍兵事部で動員召集係をしていて、徹夜で赤紙を書いていたが、人間の能力で一睡もしないのは一・二日が限度であった。上司に進言し、赤紙は間に合わないというラジオで、「在郷

軍人は武器に代わるものを携行し集合せよ。」と放送した。集まった人たちが新京市内の道路の要点に戦車の進入を止める穴を掘り続けた。このころ、毎日集中豪雨のような雨が降り続いていたことを思い出す。

ソ連軍は無抵抗の関東軍をアツという間に武装解除させ、全満州および北朝鮮を占領、新京では郊外にあった南嶺の部隊跡を収容所とし、残った家族を含む全員が収容されてしまった。そこへ移動する寸前、陸軍病院に入院させた妻子がソ連女将校に連れられて帰ってきた。時間の差であった。

何千人もの捕虜を収容する収容所に入っていたら探すことは不可能である。どこまで逃げてでも死ぬときは死ぬのだと思い、日本への帰還列車に乗せなかったのが不幸中の幸いとなった。三十八度線でストップしたとすれば子供は生きていなかった。いや、列車の中で今更ながら運命の分かれ道を痛感している。今、娘は四十五歳、二児の母親として高校の教諭をしているのも不思議に思う。あの時めぐり会わなかったら、また、帰還列車に乗せていたら、日本人孤児のようになっていたに違いない。

ソ連軍は収容所の捕虜に使役に、毎日毎日在満の物資を貨物に積み込ませ、機械類は勿論、自動車は動かない物でも修理させてソ連に送らせた。物資送りが終わると捕虜となっていた軍人を連れ帰り、三年も四年も強制労働をさせたのである。我々は戦闘部隊ではなく、軍人で事務係であった。日本では連隊区司令部（関東軍では兵事部といった）で動員計画・召集・在郷軍人の簡閲点呼・徴兵をやっていた官衙（官庁）であったが、捕虜は全部一緒にされてチタに連行されたのである。

捕虜のソ連送りが始まる数日前、一緒に収容されていた家族たちを町の日本人居留民団（終戦後、民団を町内ごとに組織して届けた）に渡すよう命令され、我々のソ連送りを予知した。私はもう部隊と行動を共にする必要もないと判断し、家族を民団に送り出すトラックに同乗し収容所を堂々と脱出した。町に出たあと、軍服を着替えし地方人に化けて民団に追加登録し、知人宅に家族と共に同居することができたのである。

収容所では毎夜鉄条網をくぐり脱出する者もいた。朝の点呼で総人員が減ってくると、町へ来て一人で歩いて

いる日本人は連行されるありさまで、買い物に出る時でも子供を背負って外出したものである。

ソ連軍は物資機材送りが終わり、捕虜のソ連連行が終わったのを機に撤退（三か月位と思う）を始めた。入れ替わりに中国の八路軍が進駐してきて満州国軍および警察隊と交戦し、三日ぐらい市街戦となった。タタミを窓に当てていて流れ弾で死んだ人もいた。銃声がやんだあとと恐る恐る街に出てみたところ、道端に民間人が死んでいた、また、満軍の守備をしていた所では、頭がザクロのようになった多くの死体に目をそむけた。八路軍は民間人には悪いことはしなかった。バケツを借りに来ても返してくれるなど安心感があった。いちばん困ったのはソ連軍の軍票が撤退前から使えなくなった。また、満州国のお金も終戦と同時に通用しなくなったり、銀行・郵便局が閉鎖されたことである。戦争に負けた日本のお金が尊重されて複雑な思いであった。

引き揚げるまでの労苦

満州の鉄道は東京のように新京（今の長春）を基点になっていたことから、ソ満国境の人たちは新京、新京と

避難してきて、学校やお寺などに収容され満杯となったが、冬になって体育館などにはストーブもなく、毛布くらいでは朝までに凍死する者も続出した。冷凍マグロのようになった人たちを何人も積み込んだ馬車がどこかへ運んでいく、生き地獄の町と化したのである。

私は幸い満州電々（NTTのような会社）の官舎に同居していてこんな目には会わなかったが、終戦と同時に銀行・郵便局は閉鎖されお金も引き出せず、僅かな衣類などを売りながらやっと親子三人の生活を続ける有様であった。

町内ごとに班を編成し、引き揚げの順番を待った。紙幣を紐の中に縫い込んだり、靴の下に隠したり、石けんをくり抜いて入れたりと色々なことが検査の時発見されて、その班は乗船できなくなったなど流言飛語が飛んで、注意が回覧された。

二十一年七月二十三日、いよいよ我々町内の番となった。新京駅には梓もない平らな無蓋車が連結されていた。やむなくタル木を打ち付けロープを回し、片隅にアンペラ（トウキビの茎で作ったゴザのこと）で囲いバケツを

置いたトイレを急造した。

こうして奉天に着いたのが真夜中であった。奉天の兵器廠あとの土間にアンペラを敷いて寝るなどが一週間くらい続いた後、引き揚げ船の入る港の手前（錦西）の収容所で乗船の順番を待つこと、半月ぐらいいも続いた。新京から錦西までの間、駅もない所に停車して何時間も動かない。やむなくみんなからお金を集めて汽関士や警備兵などに謝礼して初めて動き出す。次の駅で交代があればまた同じことを繰り返すのである。汽車が止まると暴民が列車を取り囲み、わが班のような急造トイレを作らない組の婦女子はどうしようもなく、鍋などで用をした者もいた。雨が降れば無蓋車だから毛布など被っても風で飛ばされ濡れネズミの状態であった。

錦西の収容所では高粱飯が配給され、腹を悪くする者が続出した。トイレは急造の物で下水のように土を掘り、アンペラで囲ったもので仕切りはなく、一本の下水溝をまたいでみんなが使用する。前の人のお尻がいやでも見える。これがいやで真夜中や朝早く用をたす人もいた。

我々の乗った引き揚げ船は元人間魚雷艇で小さな船で

あった。甲板の両側に人間魚雷を発射するローラのあとがあった。船尾は水面近くまで勾配になっており、また、速度を早くするため船の幅も狭い。波がくるとローリングが激しい。船内は足場丸太が三段に組んであって立つこともできない。もぐり込んで寝る有様であった。

船は博多に入港したが、コレラ等の検疫のため検使があった。甲板上に一列に並び白墨で手足の形を書き、そこに四つ這いになり試験管を肛門に差し込まれての検査であった。七月二十三日、新京出発、着のみのままに入浴もなくこの検査である。まるで動物扱いであった。

コレラの疑似患者が出て、沖に船を停泊させて十日ぐらいして再検査。やっとのことで上陸したのが九月八日であった。足かけ三か月もかかったのである。しかし、暖かいうちに引き揚げることができたのが何よりの幸いであったと今考えている。

上陸地では、一人千円より支給されず、持ち帰った現金・預金通帳・生命保険などの証書類など全て税関に強制保管されてしまった。昨年（昭和六十三年）返還するから申し出るように政府広報が新聞に出ていたが、当時

の価では郵便代にもならない。

私は身分を隠すため免許証外全部焼いてしまったので、リュック一個の哀れな姿であった。

引き揚げ後の生活

北海道小樽市の親戚を頼って引き揚げ列車に乗った。函館の駅でヤミのイカ弁当を買ったが、三百円を払った記憶がある。小樽市の隣町、高島町に着いたのが九月十三日、休む間もなく翌日から丸通の臨時傭員として働くことになった。（博多で支給された一人千円のお金も底をついている）その年の暮の十二月二十四日、裏隣からの失火で類焼、親戚もろとも丸焼けとなり、文字通り着のみのままとなってしまったのである。住む所もなくなって、やむなく札幌に嫁いでいた姉の家に同居することになった。

当時、ヤミ米一升百円から百拾円、半紙判ガラス一枚百円、一升瓶一本百円といった相場であった。生活費として一か月の給料のうち八百円だけが支給されて、あとは封鎖預金をさせられた時代である。無一文となった我々はとても勤め人では生活はできないし、姉にも迷惑をか

けることはできない。とりあえずヤミ屋を始めた。農家からヤミ米を買ってきて売るカツギ屋である。札沼線のキップは一日九十枚より売られず、朝五時から並んで予約券を買い、それがなければキップが買えないのである。そのうち、前日の十時ごろから並ぶようになった。今のような立派な駅ではなく吹雪が吹き込む建物で、空き缶に炭火を入れ毛布を覆って朝五時の予約券の順番を待った。

農家を何軒も歩き、やっと売ってくれる有様。沓（くつ）がうまる雪道、肩に重みがクイ込む。やつのことで背負ってきた米を、交番で没収されたこともあった。なんとしてでも生きねばならない。暖かいフトンで寝ることもない毎日であった。

翌二十二年夏、樺太から親・兄弟が引き揚げてきて、月寒にあった北部軍の兵舎跡に一緒に入居することになった。窓ガラスは破られ屋根だけの建物、兵舎だからタタミなどなく床板だけ。これが引き揚げ者に割り当てられた家であった。新聞を申し込んでも断られる有様である。私は引き揚げ後の努力で無一物からはい上がり、運送

免許事業を起こし、車両七十台、社員百余名の会社を四十九年まで経営したが、労組ができ、やむなく大手業者に譲渡し、今は小さなビルを建て賃貸しをしている。

それにしても、やっと生きて引き揚げることのできた妻が、昭和二十三年に亡くなってしまったことを付記して終わることとする。

以上の通り、敗戦と引き揚げの労苦を後世に語り継ぐと共に、犠牲となった数多くの慰霊に対し合掌するものであります。

新京から北上

新潟県 廣井由松

新京では生きる為、又ソ連兵のダワイを逃れるよう懸命に働いた、そうして家族や団の人達の来るのを待ち続け遂に十二月になった。聞くところに依れば西火梨や其の周辺の開拓団は一か所に集結するとの事だし、ハルビンから北の方へは二日に一回汽車が行くと聞き一同敢